

“都道府県”の学習をすすめる子どもたちから「東京や大阪・名古屋など大きな都市は、みんな“平野”にあるが、そのわけは？」と尋ねられるのですが、“地形”と人間生活との関係をどのように…。

回答者 東京学芸大学名誉教授 次山信男

大きな“平野”は、大都市の受け皿！

教室で、子どもたちが頭に描く大都市とは、どのような姿なのでしょう。

- ・マンションや住宅団地があり、おおぜいの人々が生活している（居住）
- ・大きな商店街や大きな会社、工場が集まっている（企業）
- ・小、中、高校だけでなく、大学もあり、学生が集まってくる（教育）
- ・県庁のような役所がいくつもある（行政）
- ・バスやタクシー、そして、私鉄や地下鉄もはしっている（交通）
- ・周りには、緑地や田畑が広がり、日帰り行楽地や農家も見られる（田園）

などが返ってくるでしょう。

いずれも何十万、何百万という人々が活動し、生活する姿です。この大きな活動や生活の集団をささえているのが、大きな川が育んできた広い平らな土地、つまり、“平野”という地形なのです。“平野”は、気象条件が整えば、工夫しだいでいろいろな活動や生活が展開できるからです。

ところで、東京も、大阪や名古屋も、中心に“お城”がありますが、いずれも今から数百年前、戦国時代

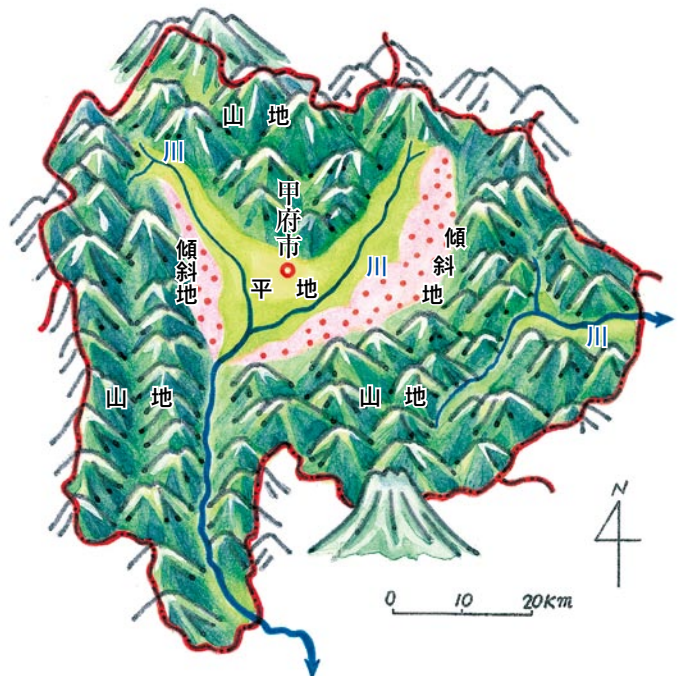
に築かれたものです。ですから、当時も、今、子どもたちが挙げた居住、企業、教育、行政、交通などの都市的な機能は、この“平野”の中心に“城下町”として展開していたのです。

“盆地”にも、大きな都市が！

教室で、“平野”と“都市”を結びつける話し合いをすればじめると、子どもたちから「県庁のある都市の中には、甲府や長野、福島や山形のように、“盆地”にあるところもあるよ！」という声も出てくるでしょう。

“盆地”というのは、周囲の山地、底部の平地、そして、中間の山麓帯（傾斜地）から成り立っている地形の総称です。子どもたちが挙げた“盆地”は、どこも規模が大きく、

山梨県甲府盆地の例



その平地が広く、都市を構成できるほどの広さがあるのです。そして、東京や大阪・名古屋と同じように、戦国時代に築かれた“お城”も見られるのです。

しかし、これらの“盆地”には、東京や大阪・名古屋に見られないものがあります。それは“盆地”を形づくる三つの部分の、中間の山麓の傾斜地に、季節を彩るぶどう・りんご・みかんなど、果樹の栽培が共通に見られることです。これは山麓帯の傾斜地の水はけのよさや、昼夜の寒暖差という微妙な気象を利用する“盆地”の姿です。

“山地や山脈”が、県の境に！

“都道府県”の広がりや地形の関係に話がすすむと、子どもたちから「“山地や山脈”が県の境になっているところが多い！」と声が上がります。地図帳（『楽しく学ぶ小学生の地図帳 初訂版』）で追えば、そのとおりなのです。確かに陸続きのところでは、“山地・山脈”や“大きな川”が県の境に選ばれています。そのわけを子どもたちに尋ねると、

- ・“山や川”で自然の囲みをつくって、県が一つのまとまりになる！
- ・“高い山や大きな川”は、自由な交通の妨げになるが、昔は、“山や川”の囲みが、外敵を防ぐのに役立った！

と、“山地・山脈”や“大きな川”がもつ隔絶性と、人間生活における“境”を結びつけて、その関係に眼を向けていきます。

しかし、ここで子どもたちが言う「県が一つのまとまりになる！」は、地図上の形の読み取りに止まっていて、“山地と森林資源”、“山地と水源とその流域（水資源）”というよ

うな、それぞれの地形と人間生活とを結びつけた“まとまり”までとらえてはいません。

また、「外敵を防ぐのに役立った！」は、群雄割拠の時代であったときのことです。自由な交通を求める現在でも、なお、“山地・山脈”や“大きな川”が県の“境”になっていることを、子どもたちはどのように考えていくのでしょうか。そして、また、地図帳を開くと、いくつかの県をまとめて“○○地方”という“まとまり”もあります。

はたして、子どもたちは、この“まとまり”ということ、どこまで現在の人間生活に結びつけて考えることができるのでしょうか。



『楽しく学ぶ小学生の地図帳 初訂版』 p.57

今回は、“平野”“盆地”“山地・山脈”の地形を、そこに展開する人間生活に結びつけた子どもたちの目から考えてきました。これを一つの入口にして、“台地”や“海岸”など、その他の地形と人間生活との結びつきに目を向けていくとともに、それぞれの“地形”そのものの成り立ちにも、子どもたちの興味をつなげられればと思うのです。いかがでしょうか。